七福神巡りの始まり－情文・七福神巡りと日本文化－

開催日：2026年2月10日
場所：東京・港区赤羽橋界隈

情報文化研究委員会

今回は情報文化、七福神巡りにまつわる話を紹介しましょう。

2008年2月10日、aacaが本部を置く港区内にある赤羽橋界隈を皮切りに、情報文化研究委員会（以下、情文）による七福神巡りが始まりました。前年、忘年会の席で「年明けに七福神巡りでもしようか?!」と、誰からともなく言い出し始めた自由で気楽な街歩きイベント。案の定、最初の七福神巡りはお酒の方が先に回り（2カ所目で）途中リタイアしたとか……。情文らしい面白エピソードである。

七福神巡りとは、宝船に乗ってやって来た七柱の外来の神様が日本古来の神社仏閣に祀られるようになり、混在化して、人々がその特別なご利益にあやかるために寺社を巡るという行事である。開運招福、家内安全、商売繁盛などを祈願し、まさに百万の神を持つ日本文化ならではの神仏習合の信仰イベントである。その起源は西方浄土「常世の国」思想とも云われ、「“福”は海の彼方から“船”に乗ってやってくる」という神話は飛鳥、聖徳太子の時代からあったようだ。

平安後期から鎌倉・室町へと時代は巡り、博多や堺の街に代表される南蛮貿易が盛んとなる。思想、宗教、科学、医学、建造等々、この“宝船”がもたらした恩恵は数えきれない。

江戸時代に入り、七福神巡りは、その解りやすさから庶民の間に急速に広まった。

大阪・今宮戎神社では、有名な「商売繁盛じゃ笹もってこい！」の掛け声も賑々しく、鯛と釣り竿を担ぐ恵比寿様を祀る。更には天照大皇大神大国主と他3柱をも一緒に祀られている。

また、古代インドの河川の女神サラスヴァティに由来するのは弁才天。日本では水が湧く場には、それにあやかり祠を掛け、七福神唯一女性の神である“弁才天”が祀られた。多産や財、芸能を司る信仰には欠かせない女神は時代と共に“弁天様”と呼ばれ、仏教の女神から神道の習合を果たしてきた。

七福神信仰とは、多様な形で今日の私たちの生活の中にも少なからず浸透している継承文化だと言えよう。

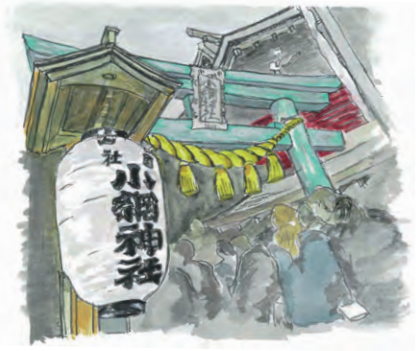
何でもかんでも楽しんでしまえ！という気風の情文の七福神巡りではあるものの、時代は進んだ。今年は初めて“笹の無いまま”帰路に就く……という、すこし寂しい一面も時代を象徴しているかのようだ。

（文・スケッチ：委員長 髙橋圭太郎）

これまでの開催

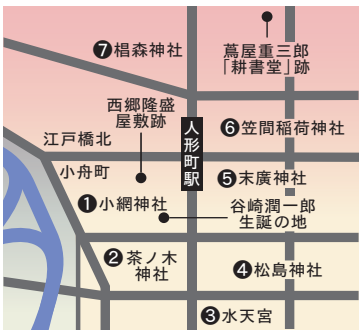
2008年…赤羽橋界隈
2009年…隅田川界隈
2010年…谷中界隈
2011年…深川界隈
2012年…目黒・山の手周辺・清正公園界隈
2013年…池袋・雑司ヶ谷界隈
2014年…白金台・池上本願寺界隈
2015年…新宿・ゴールデン街界隈
2017年…多摩・青梅界隈
2018年…葛飾柴又界隈
2019年…吉祥寺界隈
2020年…入谷・鶯谷界隈
2021年…コロナ禍（中止）
2022年…コロナ禍（中止）
2023年…多摩川河口・羽田界隈
2024年…原宿・青山・代々木界隈
2025年…品川宿旧東海道界隈
2026年…日本橋界隈

2026年の日本橋



小網神社

蔦屋重三郎



2026年七福神巡り

2025年NHK大河ドラマ「べらぼう」の舞台にもなった日本橋。この界隈を歩く七福神巡りは、全国の順路の中で最も移動距離の少ない七福神巡りと云われている。ご年配の参拝者にも人気のコースで、最初に訪れた“小網神社”は東京開運最強神社として知られ、大変な人気を博していた。弁天様が祀られる水天宮は既存建物の趣を残しつ建て替えられた都市型伝統建築。付近の江戸情緒を探しながらの小旅行が楽しめた。

＊地図上の数字が七福神